

文化財だより

第 5 号

平成 4 年 3 月

発行 真鶴町教育委員会

生涯学習と地域文化

教育長 遠藤 勢津夫

わが住む町「真鶴」は、これまでどのような歴史的な歩みをたどってきたのでしょうか。また「真鶴」を生活の舞台としてきた人々は、どのような生活を営み、どのような活動を展開してきたのでしょうか。そしてまた、それらのことどもは、現在の私達の生活にどのようなにかわっているのでしょうか。

こうした課題を少しでも明らかにしていくために、真鶴町文化財審議委員の方々による調査研究が続けられて来ておりますし、また「郷土を知る会」の方々による自主的研究活動も多く、成果を上げてきております。それと共に、多くの町民の方々による表に出ない活動も高く評価しなければならぬと思います。

この「文化財だより」は、そうした調



査研究の成果や活動を、全町民の皆様方と共有していくという上で、大きな意義と役割を持っているわけです。どうかそのような面から、この「文化財だより」の一層の活用を図って頂ければ幸いです。

ところで、「文化」とか「文化活動」ということは、端的に言って、私達自身の日常の営みそのものと考えてもよいのではないのでしょうか。したがって、文化レベルを高めるということは、私達の日常の営みを、より豊かなものに、より一層理想の姿に近づける努力にあるのではないかと思います。例えばこの「文化財だより」を手にしたとき、唯そのまゝに積み置くのと、よく読んで自分自身の営みの糧（かて）としていくのでは、文化活動という点から雲泥の差があると言えますでしょう。

また、文化活動の中で、計画的に学習に取り組むことは、その成果を高める上に大切なことです。その場合、先ず自分自身をよく見直すということの必要性が指摘されていますが、それは同時に自分自身の生活の場、活動の場としての「地域の文化」の学習の必要性にも通ずることと思います。この「文化財だより」がその手がかりになればと願っています。

私達の日々の営みが、わが住む町「真

鶴」の向上・発展に直結しているわけですが、自分自身を高めるために得た知識や技能を、さらに地域社会のために生かすことが出来たら、何とすばらしいことでしょうか。「生涯学習」の最大の意義はそこにあるのではないかと思います。

目次

生涯学習と地域文化

町教育委員会教育長

特集 真鶴年中行事あれこれ (1)

真鶴の主な年中行事暦 (2) (3)

山祝い・山祝い・石材業者の (2)

真鶴の船祝い 海運業と (3)

船祝い 田倉 常雄 (3)

海士・海女さんと祭り (3)

青木 敬三 池田 リカ (3)

小澤 和子 橋本 その (3)

長谷川 よめ 宮川 とめの (3)

山本 小志も のみなさん (4)

岩、浅間講と朝倉元吉 (4)

磯とはばのり 櫻井 光夫 (4)

セイの神とドン・ドン焼き 川ノ辺昭治 (8)

岩、頼朝船出海岸夏祭り 櫻井 光夫 (8)

郷土のことを…… (8)

地域のお年寄と…… (5)

真鶴小一・二年…… (7)

民俗資料館案内 (8)

古くから伝えられて来た年中行事にはそこに生活する人々の願いがこめられています。しかし、昔より伝えられた真鶴の年中行事も、都市化の波に呑みこまれようとしています。

そこで、漁業・石材業などと深くかわりあつた年中行事を、地域の皆さんから昔のお話を伺つたり、書いて戴いたりして、特集を組みました。

山祝い・山祝い

——石材業者の山祝い——

亀川 芳次

岩、赤馬の頂上に、大山祇神を祀る山の神社がある。

早春の相模の海は光り輝き、岩大橋・磯崎・真鶴半島の影を写す。目を移せば口開け丁場から箱根に連なる山々が、間近に迫って見える。

古びた石の鳥居を潜ると、セメント作りの小社。その中に大山祇神の石のご神体が納められている。

昔は、一月四日、石工のご先祖さんへのお札と家業の隆盛・採石安全をお祈りするための初山祝が盛大に行われた。

岩地区は元より、根府川・真鶴・吉浜・鍛冶屋などの採石業者が、現場で働く石工を伴い、幣束・供え餅（菱形餅）・お神酒を神前に供え、礼拝した後梵鐘を

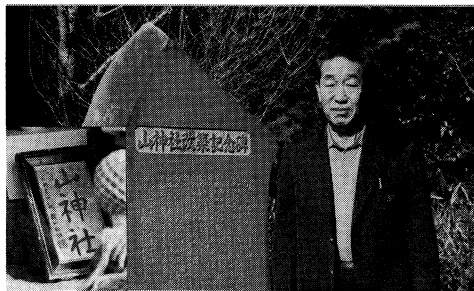
石工一同（大勢）で打ち鳴し、安全を祈った。この初山祝いは大変な賑わいだつた。山を下った石工達には、事業主の家の新年を祝い、採石安全を祈る盛大な祝宴が待っていた。

近年になり、この初山祝いは淋しくなり、十軒に満たない事業主だけが、幣束・供え餅（切り餅）・お神酒を持って、山の神へ参詣する。お参りもだんだん形式的になりはじめた。

事業主が山を下ると丁場（事業所）では、朝八時頃から従業員（石工）が集まり、採石機械や道具・運搬ダンプなどの点検を行い作業開始の準備をする。事業所内で新年の挨拶を交わし一年間の無事故を祈って清酒で乾杯解散する。

中行事 これ

しかし、四月十七日の山祝いは、宝永二年九月（一七〇五年）石工先祖、土屋格衛の徳を称えるときに、その子孫「古元業」と小河政良の下、この地の石材業を隆盛に導びいた七人の中興の祖を、岩村石材業者一同の守護神として勧請し信仰篤く祀つて来た由来に則り、幾多の石工先祖の遺徳を讃え、家業隆昌・安全を祈願する行事が、県西、石材採石業を中心に石材加工業者を含めて行われる。



神社脇の

桜の広場に参集した石材関係者の中から、事業主・従業員代表者が、山の神の前に整列し、貴船神社（稚児神社）平井宮司の奏上する祝詞を拝聴する。その後事業主は神前に玉串を奉奠する。奉奠の儀式が滞りなく終ると桜の広場に毛氈が敷かれ、相模の海を一望に眺め桜の花の下、祝いの宴席が延々と続き、手拍子、歌声も聞こえる。山祝いではないが、三月二十日には、石工先祖碑の前で、石材業者による先祖追善供養が仏式で行われる。

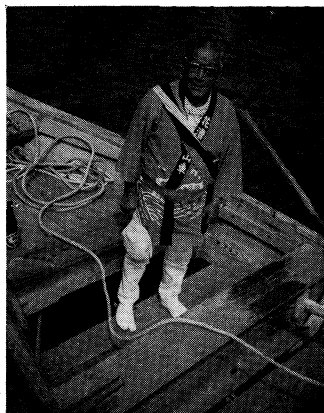
真鶴の主な年中行事暦

月	日	行 事 名
正月	1日	元旦・初詣・初荷
	5日	貴船の歳旦祭・海運業漁師の船祝（初めの賃乗り初め）船主の年始石材業の山祝（4）七草粥道祖神祭準備鏡開き・お蔵開きドンドン焼き（岩大ヶ尻）身の賃決め成人の日・小正月・十五日粥出初め式石材業者の山の神講農家の山の神講二十日正月・えびす講町内寺院の初地蔵駅裏道了尊初詣節分・豆まき初午・針供養桃の節句・ひな祭り春の彼岸
2月	3(4)日	石工先祖供養
3月	初旬	自泉院水子地藏
	3日	磯開き（昔は三月一日）
4月	8日	花まつり
	17日	内袋観音例大祭
5月	5日	石材業者の山の神講日和山生飯大師端午の節句岩竜宮神社の祭り

真鶴の船祝い

「石・石・石」海運業と船祝い

田倉 常雄



大晦日、海水で船を洗う。そして、船霊様に一升供え餅を一飾り、掛け魚二匹（ウズワ）お神酒、オカン（里芋と大根の輪切りの煮染め）を供える。

夜、オコモリと言う行事を行なう。船名の入った提灯を持たせた若衆を連れ、貴船神社にお参りをする。境内に提灯を掲げ、燃えないよう、消えないように番をさせる。その昔は、その時天下御免のセイマツリがあったそうだ。

正月二日、早朝、五十艘以上の石船がマストに大漁旗を掲げ、トモに赤と青のгентウ（油を焚いたランプ）を輝やか

せ、船主・船長など五・六人が乗り組み二列に整列する。

いよいよ、ワザオキ、乗り初めの儀式が始まる。

集真鶴年あれ

夫長（おやじ）は船印のついた提灯を持って舵取場に入り、若衆、水夫はデッキブラシを逆にとって甲板に立つ。

船長 「おやじさん、おやじさん。天気草木も日がらもよし。宝の島へ福を積みに行こうじやないか。」

おやじ 「それによからう。」

船長 「やーんで、やんで、やんで。」

若衆 「やーんで、やんで、やんで。」

船長 「とりかじー。」

おやじ 「とりかじー。」

船長 「やーんで、やんで、やんで。」

若衆 「やーんで、やんで、やんで。」

船長 「もーかーじー。」

おやじ 「もーかーじー。」

若衆 「やーんで、やんで、やんで。」
船長 「今の舵、ようそろー。」
おやじ 「今の舵、ようそろー。」

若衆は、デッキブラシで甲板をトントンと突く。

船長 「トモも良いから錨を取らん。」

船長 「やあ、おめでとーございます。」

一同 「おめでとーございます。」

一斉にエンジンがかかる。

そして、船中でお神酒。煮染めで新年を祝う。知り合いの子供達が船に乗って来れば、半紙とハツミノチンといったお年玉を渡した。

一応の祝いが済むと乗組み員全員で貴船神社にお参りをする。そして船主の家で盛大な酒盛をした時代があった。

後日、船の責任者（船長）が代表で大山参りをする。若衆を連れていく組もあった。これを大山講と言うが、航海安全祈願の大切な行事だった。大山阿夫利神社で戴いた航海安全のお礼は、船の中の船霊様に供えらるとともに船長の家の神棚にも掲げた。

相模灘から遠望する大山。円錐状にどつしりとした大山は、航行中の船にとって、何よりも安全の指標だった。

昔、相模灘が荒れ、高波で時化した時など、若衆は船板に跳き、大山に向かって一心に「南無、大山さん。海が静まるように。」と念じて助けを仰いだとの言い伝えも残っている。

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1日 岩 浅間講 風外堂だるま大師祭	26日 七夕祭	14日 稚児神社の例祭	15日 貴船神社の例大祭	13日 岩頼朝船出海岸夏祭り	17日 孟蘭盆会	8日 瀧門寺地藏尊
27日 日和山 二十六夜さん	28日 防災の日	29日 秋分・秋の彼岸	30日 岩海岸二十三夜待ち	31日 駅裏道了尊大祭	1日 船玉電神社例祭（電宮さん昔は五月三日）	2日 十三夜、お月見
31日 石材業者山の神講	1日 お十夜	2日 七五三の祝	3日 えびす講（商家）	4日 川漫り餅	5日 目一つ小僧	6日 真鶴東大通り歳の市
7日 冬至行事	8日 門松・餅つき	9日 大晦日	10日 貴船・石船のおこもり（真鶴の文化財・第5集年中行事より）	11日	12日	13日

海士・海女さんと祭り

船玉龍神社(竜宮さん) 祭り

青木 敬三 池田 リカ

長谷川 よめ 宮川 とめの

小沢 和子 山本小志も

橋本 その、方々の座談から

真鶴町の潜水漁労の歴史は、非常に古くて、古文書に依れば小田原北条時代まで遡る。「まなつるのかつき衆の内……上手式拾人……三崎へ……」と北

条朱印状とあり、海士さんのことを、「かつぎ衆」と呼び、鮑を採取していた事が分る。

時代は下って、大正時代終り頃男中心の潜水漁労に漁業組合から浦を買い(磯の権利)三重県鳥羽市から海女さんの出漁を求め稼動するようになり、フンドン



モグリの「ギリ」「半ギリ」や「タルモグリ」が行われ、盛況を見るようになった。三月一日(現在は四月一日)磯始めと言って、海士・海女さんは船玉龍神社に参詣し、豊漁と漁労の安全を祈願する。終って、仲間磯(仲間モグリ)で蓄えていた資金で宴会を開き、仲間意識を高めるとともに潜水に対する心準備をする。五月三日は、真鶴漁民全てのお祭り、「竜宮さん」が行われていた。

近年、人々のレジャー全盛時代を迎え

五月の連休時は、季節的にも磯遊び、釣り船と漁民にとっては、大変忙しい時となった。この様なことから、十月の十三夜の日に「竜宮さん祭り」が実施されるようになった。

当日の参詣者は、真鶴の漁業従事者全てであり、それぞれの組合は、自分達の漁獲物を神前に供える。

海士・海女は、三方の上に檜の葉を敷き、栄螺を山盛り載せ神前に供える。

昭和の初め頃まで真鶴では栄螺を採取しなかったとか。神前に栄螺を供えるようになったのは、それ以後だと思ふが、何時からかはよく分からない。

エビ網や小釣りの人々は伊勢エビを、定置網、漁協の人は、赤い魚(金目やホウボウ)を供える。

貴船神社宮司による大漁祈願と漁労安全の祝詞が奏上され、組合代表者等による玉串が捧げられる。海士・海女さん仲間の参拝が終ると磯初めと同様仲間同志の酒宴が場所を変えて開かれる。

船玉龍神社の脇に、海上安泰・海人族の守護神として、志摩の国より勧請した磯部の「伊雑宮」がある。そこで海女さん達は、この祭をイソベさんとも言っていたそう。

岩地区における富士信仰は、明治十六年六月一日、岩並松山頂に石神と木造の社が建てられ浅間大神が村人の信仰の場となった事に始まる。(現在の町営水道新設配水槽のところ)

当時、明治維新後近代化が進められ、この下には人車鉄道が敷かれ、小田原から熱海まで湯治客を乗せ、後に軽便鉄道へと発達した時代でもあった。

この時、富士信仰の中心的な人となったのは、富士山頂に三十三回、六根清浄の白装束は浅間神社の御朱印で真紅に染まっていたと言う岩村名主、朝倉元次郎の倅朝倉元吉であり、前記岩並松山頂が村人の信仰の場になったのである。

そして、そこには浅間大神・明治十六年六月一日建立。教導師朝倉元吉之碑、明治三十六年六月一日建立の二つの石碑がある。

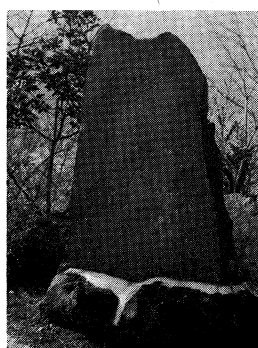
そのため現在の並松山頂周辺を土地の人々は「浅間山」と言っていた。今はほとんどの人が知らない。

元吉の父、元次郎(明治二年没)は岩村名主であり、江の浦・岩・真鶴・福浦・門川・城堀六ヶ村名主も兼ね、石材業(石丁場十七ヶ所所有) 網元・農業・米穀酒類販売業など多くの事業を行っていた。

先祖には、寛文から天和の時代、岩村の地頭で、石材業・廻船業・農業を営ん

岩浅間講と朝倉元吉

櫻井 光 夫



だ朝倉清兵衛が居り、小田原市文化財に指定されている入生田の長興山紹太寺の供養塔は、この岩村の朝倉清兵衛が「開発記念供養塔」として建てたものである。なお、延宝四年の岩村書上帳にも、名主清兵衛と記載されている。また、清兵衛の持ち船が北海道(エゾ)まで米を積んでいて流されたという記録まである。

この様な背景をもった浅間講は、岩村の各地区が毎年六月一日各戸順番に講を開き浅間大神の掛軸を掲げ附属の祭式道具一式を並べお祈をし、手造りの料理に舌鼓を打ち歓談したという。

平成三年八月六日、真鶴町郷土を知る会が中心となって、浅間山平安の碑を建立した。碑文には、古くこの地は浅間山と呼ばれ平安を願う、土地人の信仰を集めて来たこと。加えて平成の今日の繁栄。限りなき自由と比類なき平和の出現と、これを守り育てる責務が、櫻井光夫撰、亀田秋陽書によって書かれている。

郷土のことを郷土の人にきいた 岩小郷土研究クラブ

真鶴町民俗資料館

細田 耕佑

クラブで、石屋の道具を調べました。

知らない道具がいっぱいありました。

昔の道具は、小さい金づちから大きなハンマーまでたくさんありました。

石丁場や石材屋さんのことを、小野間先生と青木春江さんに説明してもらいました。昔のさぎょうはむずかしい、とききました。岩の小松石は、船で江戸に運ばれて、城や町を作るのに使ったそうです。今はダイナマイトでがけをけずっていますが、それが、どれだけむずかしいか、こわいかを教えてくれました。

石屋さんのくわい

朝倉 健一

芦澤石材にいくと、芦澤さんが石をみがいしていた。そこで、石屋さんのしごとをせつめいしてもらった。みがくものにはいくつあつて、ダイヤモンドが入っていて、しあげをしているそう。きれいにみがくと、黒いつやがでてくる。

上のしごと場では、いろいろな部分を大きな電気のかぎり、きちつと四角にきりおとしていた。石屋さんは、たくさん水を使い、二度使っていることがわかった。できあがつたものは、きずがつかないように気をつけているそう。

瀧門寺に滝があつた

松尾 圭子・川口 幸子

瀧門寺の滝のことを説明してくれたのは、仁斉先生でした。昔は、滝の水がたくさん流れていて、うなぎもいたそうです。それが、関東大震災で水が地下にもぐってしまった、今は水が流れていないことでした。

また、滝の中に大きなへびといのししが死んでいた話もききました。そのへびが龍みたいに大きかったから龍だと思われていて、そのへびの骨は、今でも箱の中にしまつてあるそうです。戦争中、その骨を身につけているとたまにあたらなうと言われ、もつていった人もいます。

昔の滝の写真や江戸時代にかかれた滝のようすの絵を見せてもらつて、いきおいよく流れているのがわかりました。今、昔のように滝が見られないのは、ざんねんです。

岩小の昔

小泉 薫
高橋 一史

今の学校は、瀧門寺の土地にあり、昔は、滝の流れを利用して、田んぼが作られたり生活に使われていたりしたそうです。

学校の始まりは寺小屋で、近くにある稚児神社を借りたり、如来寺のあと地を借りたりした時代もあったそうです。今の校舎ができる前の木造校舎のことを、何がどこにあったなど、古いつくりをくわしく教えてくれました。

去年、百周年記念式を行い、歌を作ったり、昔の写真や残っているものを展示したりしましたが、仁斉先生に話していただいて、歴史がある学校だなあと強く思いました。



岩の弁天様

朝倉 甚
柴山 高幸

説明をしてくれたのは、朝倉よねさんと公さんです。ふだんはめつたに見られない、どくつの中に入りました。おくには小さい神社のようなものがあつて、まわりには、おそなえものやお金がいっ

ぱいおいでありました。ぼくも(甚)おじいちゃんと海にいくと、十円や五円をいっぱい入れておいのりします。

まわりにかざつてある板には、健一君とぼく(高幸)のおじいちゃんの名前も書いてありました。神社のようなものの戸を開けると、中には弁天様があり、手が何本も出ていて、いろんなものを持っていました。白いへびがほられ、弁天様はきれいにぬられていました。弁天様が、海のまもり神だと教えてくれました。この弁天様も、別の場所へうつさなければならぬそうです。

石丁場にて

青木 千佳
細田 耕佑

亀川さんをたずねて石丁場へ行く、トラックがいっぱい通つていて、せまい道をぬけると、ずーと下にシャベルカーなどがありました。亀川さんは、真鶴には、世界に似ている石がない小松石があり、昔はノミ等でけずり、そりで海まで運び、船で江戸まで運んだ。時には、しけでしずんだ船もある。今は機械や便利な道具ができ、楽になつてきた。石はダイナマイトでくだいたり、シャベルカーではつたりする。深くなるほどかたくなるなどと話してくれました。

最後に、石をわる「せりや」という道具を使って石をわらしてもらいました。なかなかわれなかつたのであせつたけど、われた時はすごうれしかった。(千佳)

磯とはばのり

(古老に聞く)

中路 脩平

磯海苔は正月の雑煮に欠かせない「はばのり」または「はんば」のことである。乾燥すると葉質は硬くなるが、焼くとおいしい「振りかけ」になる。それに、あの深い緑褐色とも濃紫色とも見える海藻の色が海の豊かさを語りかけてくれるのである。

「袂より 蜜柑流しぬ

海苔搔女” 月丈

この句は、宗久月丈先生作である。

濃紺の色を流した冬の海は、めずらしく静かである。引き潮に濡れた磯の岩礁には、はばのり、あまのり等の群落がピロードのように輝いて見える。岩礁の磯面に視線をうつした時、一人の海苔搔女が着物の裾をひるがえして、向うの岩礁に飛んで渡った。その瞬間、袂から何やら落ちる物を見た。しばらくして、波が小刻みに寄せる狭間の海面に、一箇の蜜柑が流れているのを見たという。(筆者独断) 緑褐色か濃紫色か海底の藻を映した紺碧の海面と、黄金色に輝く蜜柑の取り合せ、絵を見るような光景である。真鶴の磯を象徴しているような美しい句ともいえよう。

磯海苔採取四十年以上の経験をもつ老女からの話。

「磯の海苔かきは、終戦前からのことです。たしか漁業会の規定で採取する人には鑑札を出していました。私は磯の香と新鮮な海苔の色や風味に取りつかれ、欲も手伝って、毎年のように海苔かきに明けました。最近では、海苔のつきが年々悪いそうですが、あの頃は時期になると、磯の岩にはぎっしりついて、ピロードのようでした。」と言う。

専門の海女の人達は別として、一般家庭の婦人達は、安全な足場のよい場所を選んだ。特に、その日の天候、風向きま

袂より 蜜柑流しぬ

海苔搔女

月丈

たは潮の状態によつて磯を選ぶのである。

「西風の強い日は東の磯へ、北東風の場合は西側の磯といった具合でした。山の陰は、うそのようになぎでした。私も

若かったから冬の磯も、寒さも忘れて夢中で採取しました。」と話は続いた。

昔の磯を思い出すのか、老女の瞳は夢見るように、磯に打寄せる波を見つめ、「昭和24年の台風で磯がすっかり荒れてしまい、これが漁業の不振だなどと言っているが、あれ以後だつて一頃は結構、海苔はよくついて随分採取したもんです。

あの頃、磯では皆「もんぺ」姿でしたが、ぎっしりと伸びた海苔草を見たらたまりません。「もんぺ」は脱ぎすて、着物の裾をはしょつて、少々濡れるのも感じませんでした。」となかなか元氣な話。

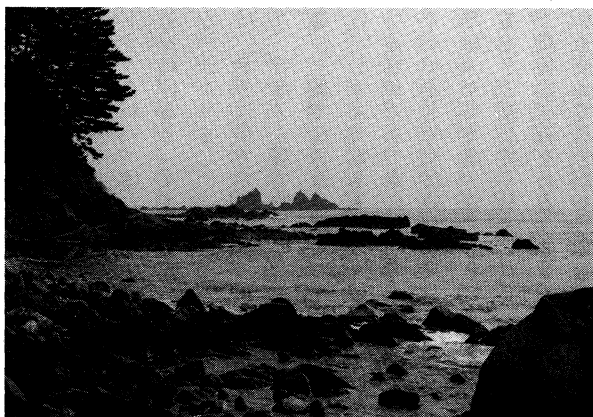
沖から見たら、さぞかしよい眺めであつたろう。しかし、磯はやはり危険な所である。「どこの磯にも飛石づたいにあぶない所がありました。一度、渡つて広い磯野に出ても満潮には引き返して、また渡らなければなりません。ところが採取に熱中して来ると時間を忘れ、溺れか

かった人もいました。

この年になつても夢に見るのは、昔の磯のことばかりです。」

磯漁業の歴史をみると、海藻も魚も、同様に濫獲・荒廃・保護の繰り返しのように思われる。三百年近く続いた徳川時代の磯の掟、すなわち「磯は根付、沖は入合」明治になつての「海面官有」そして濫獲。漁場の荒廃。この教訓を生かした漁業組合準則、そして旧漁業法の公布。真鶴では、定置漁業権や海苔漁業を含む

幾つかの共同漁業権の免許と、磯には磯の掟が昔からあった。



その昔、箱根火山の大噴火は、熔岩流を相模湾に押し出した。それが今日の真鶴半島である。変化に富んだ長い海岸線は、古くから水産資源に恵まれていた。

近年、「あんなについた「はんば」はとうしたのだろう」と。そして「昔の磯はほんだわら等の海藻がよく育ち潜ると海底は恐しい程暗かった。」とも言う。確かに磯は急速に変化してきたようである。しかし、磯は住民に得がたい自然環境を与えてくれるばかりではなく将来的にも多くの可能性を秘めた住民の財産とも言えるものである。

ワイイ・ワイイ

おもちゃ作りは楽しいな

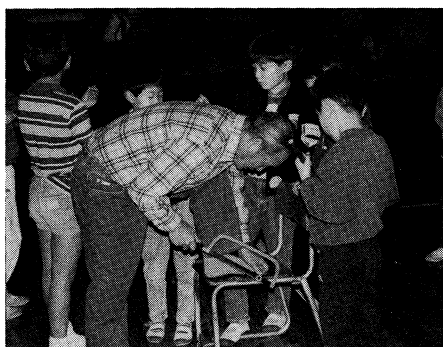
十二月十七日、真鶴小学校の体育館で一・二年生の児童が、手作りのおもちゃを、地域のお年寄り四名とお母さん方に教わりました。

これは、来年度より実施される「生活科」の「自然のものや自分たちで作ったおもちゃで遊びを工夫して楽しみ、自然のおもしろいことや不思議なことに関心を持つ」というねらいにそくして行ったものです。

当日は「和風（わだこ）」「紙玉鉄砲」「お手玉」「紙人形」の四つのものを作りました。



「たこたこあがれと
がんばった風作り



ひごのりづけ風作り
のこぎり ゴリゴリ

紙玉鉄砲

「和風」は、斉藤さんに教えていただきました。

ひごをたこ糸で結びつけたり、和紙をのりづけしたり、四苦八苦していました。しかし、できあがった時は、大喜びで体育館の中を風を持って走りまわっていました。

「紙玉鉄砲」は、鈴木さんが教えてくださいました。

この紙玉鉄砲は、篠竹で作ったもので、新聞紙をまるめて玉にするとばしました。新聞紙の量を加減したり、竹の長さを調節したりして、ポンポンと音をたてて、とばしていました。「こんなに飛ぶよ。すごいよ」と子どもたちは、口々に言っていました。

おじさん
竹を切ってね

地域のお年寄りとおもちゃ作り

真鶴小学校1・2年生



チク・チク・チク
ぬえたよ。

針に糸をとおし

きれいな布をぬって
お豆を入れてお手玉作り

「お手玉」は、飯塚さんが教えてくださいました。

初めて針を持った子どもたちでしたが、なんとか針を動かして、お手玉を作っていました。これは、児童の作文です。

「わたしは、お手玉を作りました。わたしは、はじめゆびにはりがさきまりました。いたかったです。りょう子ちゃんのお母さんが、手つだつてくれました。家に帰ってから、お母さんが作ってくれました。わたしの作ったのとお母さんの作ったものをくらべたら、お母さんのほうがすごうまかった。作りおわってからあそびました。ほんとうに作ってよかった。」

包装紙できれいな紙人形

ー世界でたった一つのー

「紙人形」は、鈴木さんが教えてくださいました。家から持って来たきれいな包装紙でお人形の着物を作りました。いろいろな顔の紙人形ができ、子ども達も大喜びでした。

「わたしは、おばあちゃんといっしょに、かみ人ぎょうづくりをしました。きものをきれいなかみでつくりました。じょうずにできて、うれしかったです。またやりたいなあとおもいました。」

これは、活動後の児童の感想です。この様にして地域のお年寄りとのおもちゃ作りは終わりました。

「生活科」の授業は、人とのふれあいの中から学んでいくものです。地域の方々の増々のご協力をお願いします。



色紙やきれいな包装紙を
使って作るのよ

セイの神（道祖神）と ドンドン焼き

川ノ辺 昭治

道祖神信仰は、真鶴・岩の全地域にわたって、塞の神、訛ってセイの神と呼ばれている。

形態は、他市町村の道祖神と違い後背を持ったものではなく、大部分が単身の僧形座像（伊豆半島から小田原市根府川付近まで）であるが、岩長坂のものだけが角柱に像が浮き彫りされている。

塞の神（道祖神）は、

真鶴地区四ヶ所九基、岩地区六ヶ所十五基（文字碑を含む）で、丸山の道祖神の台座には、西之神と彫られている。

塞の神は、辻や別れ道に立って、疫病が入るのを防ぎ、子供達の病氣や悪魔除けとして信仰された。病魔退散や願いごとが叶うとお赤飯や菓子・果物などを供えてお礼参りをした。

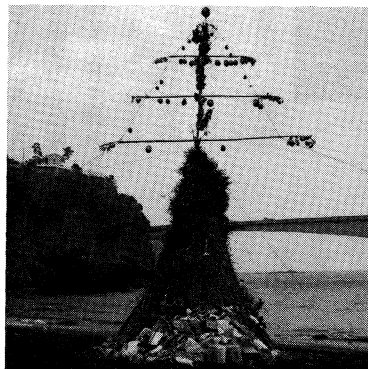
真鶴の伝承では「塞の神さんは、子供の神さんだから大人は触るものじゃない」という。大人が祈って欲しい事があると子供に頼む。こんな事も昔あった。

豊漁祈願を子供に頼む。子供達は独特の節回しで「ナムセイの神さん、おがみます。たのみます。鯛がたぐさんとれ

ますように、おがみますたのみます」と祈ったそうだ。

正月の十五日は、ドンドン焼き（オンベ焼き）。正月になると子供達は、オンベ宿に集まって、塞の神の祭りの準備をする。世話人以外は全て子供。長（大将）を中心にして山車の飾り付けをしたり、「ドンドン焼き」の場所を作る。

オンベ宿は、代々世襲の地区と当番制で引き受ける地区があった。（現在、オンベ宿に集まる風習はなくなった。）



孟宗竹を中心立て、四メートル四方くらいの円錐空間をとり、女竹で囲み小屋を作る。忘れてはならないことは、中心最高部から四方に縄を張り出し、ゲルマをつるす。（似た物は、現在でも大ヶ尻海岸や岩海岸に作られる）周囲を正月飾りや

塞の神に納められた物で囲む。

飾り付けられた山車の中心に御幣を据え、太鼓を打ち鳴し、十四・十五日町内を巡る。昔は「この家の床の間にや、白きねずみが、金をくわえて……………」などと言って家々を回り歩いた。

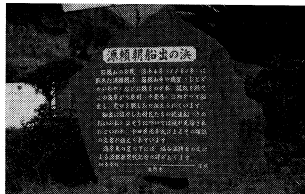
十四日又は、十五日にドンドン焼きの火入れが火打石で昔風に行われ、その炎は赤々と夜空を焦がし、手に持つダンゴ（まゆ玉）を照らす。

岩、頼朝 船出海岸夏祭り

夏祭実行委員長 櫻井 光夫

岩海岸で、毎年夏祭りとして、灯籠流しが行われている。これは、昭和五十年に真鶴町観光協会が、観光行事として、真鶴港と岩海岸の二か所で実施したものである。しかし、此の行事は一年で終り続かなかった。

そこで岩地区では、戦前（昭和二十年）に毎年盆行事として行われて来た精霊流しを、祖霊追善供養の灯籠流しとし、松



明焼、お施餓鬼供養の瀧門寺川口住職の読経、子供会・婦人会を中心とした盆踊りを一日の行事として計画し、「岩海岸灯籠流し」として実施され昨年で十七回を数えるまでになった。

その間、真鶴地区や他市町村の人達の希望による灯籠流しへの参加もあり、灯籠も増大すると同時に昭和五十六年度からは嶺南仏教会の住職の協力まで得られるようになった。

そして、名称も「岩頼朝船出海岸夏祭り」となり、町観光協会の協力による花火も実施され、八月の第一土曜日、夏の楽しい一日を飾っている。

民俗資料館案内

昭和61年2月に開館した、真鶴町岩にある民俗資料館は、土屋家旧宅を借用し、多くの貴重な美術工芸品、日常生活用品、また真鶴の基幹産業ともいえるべき漁業・石材業関係の史料を展示しています。

開館日時は

毎週火・木・土・日曜日及び祝祭日の午前10時から午後4時までです。

一人でも多くの方がご来館の上、真鶴の生活文化にふれて戴きたいと思っています。

町史編さん室だより

ひかり輝く相模の海に臨み、緑豊かな自然環境に恵まれた町。遠い祖先が長い歴史を積み上げた町、真鶴。

先人たちによって、守り残され伝えられてきた貴重な資料を基に昭和62年度より町史編さんに着手し、着々と進展しております。

町民の皆様の身近にある資料のご提供にご協力くださるようお願いいたします。

編集後記

大勢の方々のご協力を得て、「文化財だより、特集年中行事編」が出来あがりました。まだまだ、隠れた行事・知られない伝承・真鶴と岩の行事の相違、また職業上の行事・仕来りなどもあると思います。情報をお寄せ下さい。